

## 江戸里神楽公演を新聞記事から振り返る-文化事業とメディア-

草間範子

何かしらの企画を行う上で、多くの場合、その実施組織は自らの組織、企画の特性を理解し、何かしらの理想形に向かって企画を行い、実行する。そして、その試みが参加者に伝わったとき、その企画は成功を収めることとなる。

文化事業についても同様である。それどころか、本公演のように伝統芸能など扱った場合にはなおさら、日頃芸能に興味を持っている方々にしか発信情報が届かず、内内の企画となりかねない。もとよりコアな対象者への密度の高い企画を、などのコンセプトであれば、それはそれで良いだろう。

ただし、文化事業にも現実的な制約はある。特に非営利的に文化事業を行う場合、大きな課題として「実施組織の立ち上げ」「資金の捻出」「広報・集客」などの問題が立ちふさがる。継続して活動できる実施組織には、それなりの人員が必要となる。会場を確保するにも資金は必要となる。そして、どんなに良い企画であっても、とにかく知っていただかなければ集客は望めない。

本公演は「楽しくて、わかりやすい」と掲げ、これまで里神楽に触れて来なかつた方にも楽しんでもらえる企画として位置づけられている。そのための工夫も、実施組織内や公演内には沢山なされている。年々公演を重ねるごとに工夫を重ね、着々と進化している。一方で、期待する来場者には、芸能に強くは興味を持たず、日頃自分から情報収集を行っていないような方々が含まれている。どんなに内容を確立させても、実施組織側からの情報発信を積極的に、意識的に行わない限り、このような方々にご来場いただける可能性は限りなく低い。

公演の特徴や行っている工夫を、どのように外へ向かって発信するか、知っていただけたかという点は、内部での準備を終えた公演が外部とつながる最初の段階である。この重要性は看過できない。そこで、公演についての広報、外部への情報発信の面について着目する。

本稿では、新聞メディアにおける「楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演」の扱われ方について取り上げたい。

本公演はホームページ等による広報も行っているが、広報の中でも、特に新聞記事等のメディアを介したものは、より受動的に情報を受け取れることから、情報の受け取り手を選ばず幅広く認知されることが期待できる。

また、新聞記事の場合、実施組織である実行委員会が直接原稿を執筆していない。新聞の作り手という、情報の発信に主眼を置いた第三者によって作り上げられる。つまり、実行委員会の思う自らの特徴、売り文句、やりたいこと、見せたいこと、その他無数にある発信したい情報から、受け取り手に喜ばれる情報、読み手の興味を持たせるに値する情報と判断された部分が取り上げられる。この特性があった上で掲載された記事は、実行委員会が外向きに発信したかった内容の一部であると同時に、委員会外から評価された内容で

あると考えられる。外部によって作成される公演についての情報発信内容は、そのまま公演について振り返る大変貴重な材料となる。

記事掲載による影響は、外部の判断を伺う自己反省の材料となるに留まらない。前述のように、新聞記事は他の情報発信ツールに先んじて多くの方々の目に留まることが期待される。つまり、公演を知るきっかけの多くが、新聞記事によるものとなる可能性がある。情報の受け取り手、この場合は新聞の読み手にとって、掲載された記事が公演の第一印象となるのである。

実際の新聞記事を取り上げる前に、これまでの公演に触れた上で自身が感じ、把握している本公演の特性、強み等について簡単に挙げて行きたい。

まず、上演される里神楽が、毎公演しっかりと、現に地域で上演され続けている生の神楽であることを挙げたい。これまで何回もの公演を経て、何種類もの神楽の公演をいただいている。それぞれの神楽、社中には実際の地域での歴史がある。この本物の里神楽に、地域に分け入らずして触れることができる。芸能についての初心者はもとより、芸能好きな来場者にとっても、ご満足いただける点ではないかと考えている。

また、神楽という、本来神の在るところで行われてきた芸能を舞台上で行い、地域を問わない観客に向け発信するという、事業のコンセプトそのものもまた、本公演の特徴となる。公演内における神楽は、特定の場所、観客による祈願の場を礎とする本来の姿を離れ、文化事業としての姿を見せる。更に公演内で、またパンフレットとして詳細に解説を加える。ここには外国語での解説も用意された。文化としての神楽を、特に開かれた形で、広く紹介することに主眼を置いた企画である。

次に、実行委員会において、学生スタッフがその多くの役割を担っていることが挙げられる。この学生スタッフは、その多くが毎年入れ替わり、毎年様々な学生が関わり、公演を作り上げて來た。その中には、神楽など全く関わってこなかったという学生から、芸能に興味のある学生、舞台芸術に興味のある学生、と様々な立場からの参加が見られる。このことで、毎年多くの学生が、里神楽に真剣に取り組む芸能の提供側としての経験を積んでいる。公演には若く新しい視点が常に存在し、外国語字幕や幕間の企画等ではその独創性を期待することが出来る。学生達にとっても、自分たちでひとつの公演を作り上げ、スポンサーとなる企業訪問を行うなど、公演の実務的な面に関わる経験は貴重なものとなるだろう。

公演を行うには、学生以外にも、数多くのスタッフの尽力が必要となる。実行委員会には、学生以外にも、シニアスタッフに代表される幅広い年齢層が参加している。学生スタッフを中心として運営されることは、年齢的にも、年々スタッフが入れ替わる点からも、運営の不安定さも抱えている。ともすれば公演の運営そのものに関わるこの問題を支えるのが、このスタッフ達の尽力となる。

他にも神楽師の方々はじめ芸能の側に立つ方々との関わり、企業からいただく助成や県の文化事業としての公演等、それぞれの公演が様々な特色を持ち、それら全てにより成り

立ってきた。では、このように成り立ってきた公演を、第三者である新聞記事に向けどのように発信し、どのような面が取り上げられて来ただろうか。

数多く掲載していただいた新聞記事のうち、今回は初回公演後の平成20年2月の記事の他、既に前回公演が存在する第二回以降公演について、平成20年12月から平成21年2月にかけての第二回公演記事、平成22年1月、2月の第三回公演記事、平成22年10月、11月の第四回公演記事を取り上げ、情報発信の上での本公演がどのように作り上げられて来たか確認したい。また、公演の形が安定した後の平成26年第8回公演において、一連の記事に着目し、その内容について整理する。

初回公演について、平成20年2月23日の朝日新聞では『大学生ら神楽興行』という見出しのもと「大学生らが設立した学生実行委員会が」神楽公演を開いた、と記述されている。『柱外し英語字幕も』『伝統芸能「見せる」工夫』と大字で打ち出し、掲載写真には、神楽の舞い手と、英語字幕の映るスクリーンが一枚に収められている。

この記事においての本公演は、大学生が新しい視点から、舞台の工夫や英語字幕の導入を行い伝統芸能に挑んだことが前面に押し出された。英語字幕、演目間に行った着付け披露、神楽殿の柱を無くした見やすさの工夫がアピールされた一方で、この公演では石山裕雅社中による上演であったが、本物の生きた神楽が敷居高くなく鑑賞できるという点については埋もれてしまった印象である。また、学生による運営となると、どうしても拙さや未熟さといったマイナスのイメージも想起しやすい。実際にはシニアスタッフ等の幅広い実施組織があることも見えにくく、取り組みの斬新さを印象付ける一方で、芸能への真摯な公演であるイメージは薄れるように感じられた。

初回公演の記事に見られた傾向は、翌年以降の公演広報にも継続して見受けられる。第2回公演の記事では、公演概要とチケット案内を主とするインフォメーションの他に『学生興行神楽　日中韓の輪』(平成20年12月5日朝日新聞)、『学生発　親しみ神楽』(平成21年2月4日読売新聞)、『都内の学生ら集まり企画　江戸里神楽を公演』(平成21年2月10日東京新聞)、『学生企画の江戸里神楽』(平成21年2月13日埼玉新聞)といった記事が掲載されている。

やはり学生が神楽公演を企画するという点は、記事を作る際に重視されるに足るインパクトがあるのだろう。同時に、実行委員会としても、埼玉県で行う事業として地域の学生が活躍していることはアピールポイントとなる。どの記事も外国語字幕等企画の新しさにも触れており、伝統的な芸能を若い世代が、新しい取り組みとともに紹介するという本公演の強みが強調された結果となった。

しかし、初回公演記事と異なる部分もある。第二回公演記事では、実行委員会提供の写真がそれぞれ神楽の一場面のものとなっており、芸能としての神楽が印象付けられる。

学生、外国語字幕といった外部からも取り上げやすい部分は一定の認知と評価に繋がったと想像されるが、やはり神楽を上演しているという企画そのものや、実際の社中による本物の神楽という面を置き去りにし過ぎてはならない。楽しく、わかりやすく神楽に接し

ていただくことを公演名としても掲げている以上、当然のことながら、主役は神楽である。新聞記事における掲載写真の印象付けの効果は大きいと考えられることから、第二回公演記事では取り組みの面白さと主役である神楽でのバランスがとれて来たと言える。未だ見えないのは、学生だけではなく幅広い世代が携わる企画だからこそ持てる、企画や知識、対応力の層の厚さ、また、何よりあくまでもリアルな神楽を劇場公演として提供できるという公演の本旨とも言える部分だろう。

初回、第二回を経ての第三回公演では、記事上の取り上げ方にも変化が見られる。

『伝統芸能の魅力 学生が表現』（平成 22 年 1 月 6 日読売新聞）と題された記事は、やはり学生スタッフを強く感じさせる見出しどとなる。しかし、本文中では第三回公演をいたいた岡田民五郎社中や演目が紹介され、学生スタッフでも美術大学の学生が舞台技術担当として関わっていることが読み取れる。掲載写真には社中の岡田代表と数人の学生スタッフらが写されている。これまでの記事と異なり、神楽の社中や内容が印象に残る。学生スタッフについても、ただ学生が頑張っているということではなく、個々が専門を生かして参加している姿が見える。第三回公演は 2 月 18 日に行われており、一か月前の広報記事として効果的だったと想像できる。

同じく第三回公演の記事では『学生集まり神楽舞う』『シニアが裏方で支援』（平成 28 年 2 月 18 日）として、シニアスタッフの活動が取り上げられた。公演当日の記事ではあるが、シニアスタッフの構成や活動内容に触れ、掲載写真もシニアスタッフによるものが掲載された。運営側の層の厚さ、活動の広さを強く印象付けている。また、第三回公演では学生が演者としても参加しており、その稽古風景が掲載された。この点にも、これまでに無いインパクトがあつたんだろう。公演後は『満員御礼！大学生企画の神楽公演』（平成 22 年 2 月 19 日産経新聞）の記事が掲載され、学生スタッフが 15 の大学から集まっていること、さいたま市の神楽師による公演であったこと、日本語、英語の解説字幕など、神楽の一場面の写真とともに簡潔に紹介された。

第四回公演記事では、第三回から更に踏み込んだ内容が見られる。

『里神楽公演 大学生らが計画』（平成 22 年 10 月 15 日読売新聞）では、小見出しが『衰退危機 「伝統守れ」と奔走』とされ、「担い手不足で苦境に立つ里神楽を支援」する取り組みとして、解説字幕や四か国語によるパンフレット等を取り上げている。里神楽がどのようなものか、どのような状況にあるのか、これまでの新聞記事と異なる視点から伝えており、公演を行うことが伝統芸能の継承に寄与する可能性を伝えている。公演の位置づけとして、これは大きな変化であるように思う。

同じく第四回公演記事では『神楽公演 若い力で』（平成 22 年 11 月 17 日毎日新聞）として、シニアスタッフへの協力呼びかけを含む学生の取り組みが掲載された。新聞本紙ではなく折り込みではあるが、平成 22 年 11 月号の『定年時代』での 1 面、2 面を用いての記事掲載もとても興味深い。公演内容と学生を含む実行委員会の活動を紹介しつつ、シニアの協力スタッフとしての参加を呼び掛けた。若者の黒子となり伝統芸能の伝承に関わる

運営方法として紹介されており、第三回でのシニアへの着目から引き続き、公演スタッフの多様性を充実させる動きが見える。

このように、初回公演から第四回公演だけでも、新聞紙面における公演内容の発信が進み、公演の運営の充実が図られて行く様子がうかがえる。

では、このように発展してきた公演が、第八回公演ではどのように運営され、発信されただろうか。

まずは平成 26 年 1 月 7 日、同年 9 月の公演に先駆けて『江戸里神楽公演ボランティア募集』(埼玉新聞) の記事が掲載された。「学生ボランティア」と「シニアボランティア」を同時に募集しており、実行委員会の中核となるこの 2 種のスタッフを並行して扱っている。

その後の記事には、以前にはあまり無かった観点からの記述が続く。『企画準備で社会体験』『伝統芸能公演と就活を両立』(平成 26 年 3 月 10 日埼玉新聞) では、写真、本文ともに 2 人の女子学生を取り上げ、就職活動を見越しての活動の充実、やりがい等が語られる。これは実行委員会への学生募集を意図しての記事であるが、初期と比較すると、公演内容ではなくスタッフとしての活動を広報し、広く公開している。公演自体への記事と並べると、スタッフ側への利点を明らかにすることによる、手の内を明かすような不思議さを感じる。しかし、公演スタッフの個の姿が見える記事でもあり、運営スタッフを含めた公演全体としての実態を明らかにしている点は情報発信として面白いとも感じる。

同様の視点から学生の活動の充実を掲載した記事には同年 4 月 11 日の東武朝日新聞『まちの達人』コーナーでの女子学生 3 人を取り上げたものがある。これは「輝いている人をクローズアップ」として掲載されるコーナーであり、伝統芸能の公演という経験を通じ、奮闘する学生の姿が発信される。

公演に向けての記事は第八回になると件数も増え、『「江戸里神楽」見てほしい』『県立大生ら実行委結成』(東武よみうり新聞) 『「若い世代も見て」運営の学生 PR』(埼玉新聞) では支援者を訪問した際の支援者と学生の写真を掲載し、資金集めを含め、学生が自ら奔走する様子を書き出している。

平成 26 年 7 月 28 日の東武よみうり新聞では『日中の学生が“江戸里神楽友好”』として中国語解説の作成風景を写真付きで紹介している。多言語での解説は以前から行っていたが、7 人の女生が大学内で作業に取り組む写真が添えられ、目を引く記事となっている。

その後『伝統芸能を次世代へ』(平成 26 年 9 月 12 日埼玉新聞)、『国文化財「坂戸の大宮住吉神楽」学生、裏方で舞台支える』(平成 26 年 9 月 17 日東京新聞)、『日本の伝統芸能 次世代へつなげ』(平成 26 年 9 月 24 日産経新聞) と、女子学生らがポスターを手にした写真を中心とした記事が続く。

初期の新聞記事と比較すると学生の笑顔が印象的な華やかな記事となっている。公演を重ね掲載紙が増えたということを加味しても、このタイミングでの記事掲載が同時に複数叶っていることから、発信した情報と掲載したい、掲載しやすい情報のうまく組み合った地点はこのあたりだろうか、と感じた。内容としては学生の奮闘や活躍を中心として構成

され、神楽や公演、公演における工夫等、語り手として学生が登場している。その学生達は「ほとんどは参加前まで神楽を見たことがなかった」とも記述され、神楽に触れることすら少なかった学生達が、自分たちなりに里神楽を理解し、公演までに尽力する物語が見て取れる。

これは第八回公演の実際の姿でありながら、しかし広報向けに特化した感が否めない。これは、以前には見られた、学生スタッフとそれを支えるその他スタッフによるバランス感や、学生スタッフの能力を生かした公演という姿は見えにくく、未熟だった学生たちの成長物語が中心になり過ぎているように感じられたことによる。掲載写真に写る学生がすべて女子学生である点もまた、実行委員会の一部をクローズアップして構築された物語と言う印象があり、公演の実際でありながら本質見えにくくしているようにも思える。しかしこれが、新聞記事を通して情報の受け手の関心を引く、アピールするための方法でもあるのかもしれない。情報を発信するにはまず、記事にしてもらえる、広く受け入れられる物語が必要なのだろう。

平成 26 年 9 月 25 日、公演を前日に控えた読売新聞掲載記事では、『学生が裏方 あす神楽公演』として神楽の場面写真が使用され、出演団体の紹介、演目、公演情報、解説字幕やプログラムを含めた記事が掲載された。「神楽に興味を持つ大学生が集まったサークル活動の一環」との表現には少々の疑問を感じたが、公演内容を中心とした記事となっている。

第八回公演については、講演後の同年 11 月に「雄勝法印神楽」と「大宮住吉神楽」との交流イベントが行われたことでも紙面掲載を受けている。『被災地で“神楽交流”』(平成 26 年 12 月 1 日東武よみうり新聞) では、雄勝法印神楽と、交流会議で司会を務めた公演実行委員会いの学生の写真を掲載し、「ユニークな“神楽交流”イベント」としてこの取り組みを発信した。震災により被害を受けつつも復活を遂げた雄勝法印神楽との、神楽を通じた県を超えての交流の内容が紹介され、次の公演にも繋がる記事となった。同様に『県立大の学生らが宮城の被災地訪問』(平成 26 年 12 月 17 日埼玉新聞) でもこの交流が取り上げられており、公演の発展にとっても、また、情報の発信の上でも、地域を大きく広げての活動のインパクトは大きい。

新聞記事の発信する情報は、必ずしも情報の発信手が伝えたい内容と一致しない。今回取り上げた、公演に関する新聞記事は全体の一部であり、さらにその情報それぞれが発信された経緯、掲載のきっかけ等検討できる点は多く残っている。しかし、発信された情報である事、新聞記事として選択され掲載された情報であることから、実行委員会が発信したかった情報のうちの一角であり、第三者である新聞の作り手により求められた情報であると考えても良いだろう。だとすれば、これまでの公演でうまく伝えてきた内容、もっと使えたかった内容は何だろうか。

初回公演から第四回公演の記事では、発信される記事は里神楽の公演を行うこと、それに伴い学生主体による実行委員会が結成されていることが中心となっていたように思う。加えて、回を重ねるごとに、協力をいただいた神楽師、シニアのスタッフの姿が見えてく

る。また、学生もそれぞれに自分の能力を生かしている様子が記述され、情報上において公演の充実が見て取れる。第四回公演頃には公演の持つ性格を各方面から描いてもらえる様になり、発信情報も届けたい相手に合わせた内容を的確に発信する素地が出来上がったようと思われる。

その後、第八回を迎えるまでには、目的ごと、内容ごとに情報を伝えていた記事が、物語性を帯びてくる。学生スタッフの公演への尽力が、学生本人の成長物語として見えるようになった。学生スタッフの募集と公演の印象付け、取り組みの新しさが強く押し出される。一つの記事による各方面へのアピールが期待され、掲載写真もそれに合わせた内容となつた。

一方で、途中から影を潜めてしまった面もある。記事で取り上げられるのは学生スタッフの一部であり、実行委員会全体でも、公演全体でもない。特に女子学生の活躍の場面が多く、親しみやすい雰囲気や明るい光景を示しているが、当初あった神楽への真摯な姿勢は見えにくい。同時に、それを裏付けていた多様なスタッフや取り組みの工夫等、学生スタッフが主役になりすぎることで傍役となってしまった公演本来の強みが他にもあったのではないかと考えてしまう。

とはいって、これまで書き連ねてきた内容はあくまでも自身の感じるところであり、この捉え方は、公演に関わったそれぞれの立場、考えによって変わってくるべきものである。メディアを通して客観的に公演を見つめたとき、各々思うところがあり、同じ文面を読んでも満足もし、不満も感じる。これは当然のことであり、ここでこそ、それぞれの掲げる目標や理想が最も浮彫になるだろう。

だとすれば、公演に関わった者として必要となる作業は、それぞれが自身の作り上げた公演について、メディアを通して再確認し、そこから生じるそれぞれの考え方を持ち寄り、すり合わせることではないか。

広報は、発信したい情報を押し付けるものではない。発信した数多くの情報から何がどのように取り上げられるかは、そのメディア媒体、時世、その他さまざまな要因によって変化する。良し悪しではなく振り返りの材料としてこれを捉え、自己の取り組みが周囲に与える影響や周囲の評価を知り、また次の取り組みにつなげて行けたなら、メディアによる広報はただ集客のための媒体ではなく、何倍も有用なものとして利用できるだろう。

今回の企画ではぜひ、本稿で取り上げた一部のものに限らずこれまでのメディアの記録を振り返り、公演の本旨に立ち返りながら目標を定め、自己反省を繰り返しながら取り組めれば良い。そうなれば、その発展はより目覚ましいものとなるのではないか。とても楽しみに思う。